

# 旧帝国の軍神

トクマル

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

5年前のクーデターにより滅びたアーカディア旧帝国。そのアーカディア帝国のたった一機で装甲機竜千二百機をほぼ全滅させた「黒き英雄」。しかしほぼ全滅させただけであって本当に全滅した訳ではない。一機だけいたのだ。その全滅から逃れた装甲機竜が。

# 目次

第1話・プロローグ	1
第2話・学園での任務	9
第3話・学園での生活	21
第4話・テルマvs三和音	33
第5話・留学生からの依頼	47
第6話・幻神獣の襲来	57
第7話・王女の覚悟	66
第8話・黒き英雄	74
第9話・王子の居場所、軍人の居場所	87
第10話・争奪戦	101



# 第1話・プロローグ

戦争の兵器といえは何を思い浮かべるだろうか？

銃？ 大砲？ 戦車？

それらも立派な兵器だろう。しかしそれらの兵器は十年程前に鉄ぐず同然となつてしまつた。遺跡から発掘された古代兵器・機竜。それは世界の7つの遺跡から発掘された伝説の竜を模した機械装甲である。それらの登場により国の軍事力は装甲機竜ドラッグナイトとそれを操る機竜使いになつた。

十

赤々と燃えたぎる炎。アーカディア帝国の城が燃えていた。その城を背にしながら一機の機竜が走つてゆく。乗っているのはまだ12歳ほどの少年だ。

「はあ、はあ」

息を切らしながらも機竜を操作し懸命に城から離れる。だが

「……………ッ！」

小さな声とともに機竜が解除され地面に投げたされる。身体中傷だらけで呼吸も荒い。これ以上動ける様子ではない。しかしそれでも這つてでも少年は城から離れもうとする。まだ城の上空では一機の機竜に他の機竜が次々に破壊されてゆくのが音で分かる。いつ全てが倒され自分が狙われるか分からない。

(逃げなきや)

そう思うがもう身体は動かない。言うこともできず呼吸をするのがやつとの状態だ。そんな少年の前に5機の装甲機竜が降りてきた。装甲の色からして旧帝国の機体では無いことは分かる。

「君、大丈夫か………」

と一人が声をかけてくるが少年の腰に指してある機攻殻剣を目にすると途端に戦闘態勢に入る。それを見た他の機竜使いも次々に戦闘態勢を取る。ある者はブレードを、ある者はキャノンを向けてくる。

(ここまでかな)

と少年は思う。せめて痛みなく殺してほしいと思うが既に傷だらけで身体中痛い。少年は目を閉じて来るべき衝撃に備える。

(?)

しかしいつまで経っても衝撃が来ないので不思議に思つて少年が目を開けると、機竜使いの一人が装甲を解除し、こちらに歩いて来る。

「君、大丈夫かい？」

そう優しく問われた。さつきと変わらない言葉なのに人が変わるだけでこうも違うのかと一瞬感動を覚える。がそこで気が抜けてしまったのか少年の意識はだんだんと失われてゆく。

(なにか……)

そこで少年の意識はなくなつた。

## 十

意識を失つた少年を男が抱き抱える。

「隊長！本当にその少年を保護するのですか!？」

隊員であろう男が隊長に抗議する。

「ああ、この子はまだ子供だ、殺すことはないだろ。」

隊長と呼ばれている男は隊員の怒鳴り声にも全く動じず当然のように答える。しかし、

「いくら子どもとはいえ帝国の人間ですよ！もし復讐でもされたら……」

隊員の意見も最もだろう。それでも隊長は断固として譲らなかつた。隊員たちもそんな隊長折れその少年は保護されることになった。

+

「う……………」

小さなうめき声とともに少年は目を覚ます。覚醒までに1分ほど掛かり自分の状況



を確認する。

(どこだここは?)

少年が寝ていたのはセミダブル位のベット。結構高そうなベットだった。身体には包帯が巻かれており身体中が痛む。何とか起き上がり身の回りの状態を確認する。

(ワイバーンの機攻殻剣はある。)

ベットの横には自分の使っていた機攻殻剣が置いてある。痛む身体を何とか動かし、それを手に取ったと同時に部屋の扉が開かれた。

「お、起きたのかい。」

入って来たのは女の子だった。青い髪に凜とした佇まい、歳は自分よりも1つか2つ上位だろう。それなのに随分と大人びて見える。

「……………っ!」

とつさに機攻殻剣で斬りかかろうとするが、

「……………ぐあ」

身体中に痛みが走り斬りかかるところか剣を落としてしまい、少年もベットから落ちてしまった。

「……………、怪我人なんだから大人しくしてないと駄目だろう。」

やれやれとため息を吐きながらベットから落ちた少年に手を貸してベットに寝かせ

ようとする。が

「やめろ！」

少年はその手を振り払おうとする。

しかし、

「……………ぐうう！」

振り払おうとするとさらに痛みが走り完全にうつ伏せてしまう。

「全く、しようがないな。」

そう言うとき少女は少年の身体に手を回し持ち上げベットに運んだ。

「僕をどうすつもりだ？」

少年は少女に問う。恐らく自分は帝国の人間だから罪人扱いされるはずだ。今投獄されてないのを見るにこの怪我が治るまでが猶予なのかも知れない。

「安心したまえ別に君に危害を加えるようなことはしないよ。」

少女は優しく言った。

「……………僕は帝国の人間だぞ。」

「でもただの兵士だろうか？」

「お前らの敵だぞ。」

「君が私に何かしたわけではないだろう。」

少年の眩きに少女は悠々と返す。そんな問答をしていると、

「おお、目を覚ましたのかい」

いかにも軍人らしい男が入ってきた。少年は警戒するがその顔にどこか見覚えがあった。

「そうだ、確か気を失う前に見た顔だと少年は思う。」

「そう警戒しないでくれ、と言いたいところだが、そんなすぐには無理か。」

「そう男は言う。」

「私の名はバルトシフト。こっちは娘のシヤリスだ。君の名前は？」

「……………テルマ」

「そうか。テルマと言うのか。」

バルトシフトはウンウンと頷き、

「テルマ君、もし良かったら私に君を引き取らせてくれないか？」

「……………は？」

「はあ？なんだって？引き取る？この人が？僕を？」

頭が混乱する。そんな混乱が顔に出ていたのだろう

「いや、驚かせてすまない。ただ、今君の御両親の事を探しているのだが、なかなか見つからなくてね。もしこのまま見つからなかったらと言う意味だよ。」

確かにこのまま両親が見つからなければどこかに引き取られるのかも知れない。それなら少しでも知っている人に引き取られる方がいいだろう。

それに

「両親はとつくに死んでる。家族はもういない。」

家族はとつくに死んでしまっていた。

だから

「お願いします…」

こうして少年はテルマ・バルトシフトとなった。

## 第2話・学園での任務

「はっ、はっ、はっ、」

朝日が出てまもないころ、王都の街をタツタツタと走る足音が聞こえる。一人の少年、テルマ・バルトシフトだ。早朝なので余り足音を大きくくしないように軽やかに走る。これは彼の日課だ。

アテイスマータ新王国

5年前アーカディア帝国滅亡後建国された国家だ。

十

「失礼します。」

午後王都の屋敷にテルマはいた。新しい任務の為にここに呼び出されたのだ。

「おお、来たか。」

そこにいたのはバルトシフト副指令。テルマの義理の父だ。

「そんな他人行儀じゃなくていいぞ。今は二人しかいないからな。」

「うん。分かった。」

バルトシフトにテルマはそう返す。

これはバルトシフトがちよつとでも仲良くなれるように二人しかいない時は敬語で無くても良い事になっている。

「それで父さん今日は何用ですか？」

「クロスフィード城塞都市にある王立士官学園アカカデミーは知っているな。」

王立士官学園

アテイスマータ新王国が管理するドラグナイト機竜使いを育成する学校だ。

そして

「シャリス姉がいるところですよね。」

テルマの義理の姉シャリス・バルトシフトが通っているところでもある。確か今年は3年なっていたはずだ。

「そこがどうかしたんですか？」

「そこにルクス・アーカディアが行くそうだ。」

ルクス・アーカディア

旧帝国の第七皇子。旧帝国が滅びたのち、新王国の恩赦により釈放されその条件として国民の雑用依頼を受けることとなっている。

「何でまた？確かあそこ女学園でしたよね。」

機竜使いの適性の高さは女性の方が上なので女学園となっている。

「これも彼の雑用の1つだ。装甲機竜ドラッグライドの整備のな。」

「なるほど。」

装甲機竜の整備はかなり難しい。それに危険なこともあるだろう。それなら男手があつた方がいい。

「と、言うことは僕の役目はルクス・アーカディアの監視ですね。」

「そうだ。話が早くて助かる。まあ何も無いと思うのだが「形だけでもな。」と女王からのお達しだ。」

それでもしないと他の者が納得しないらしい。さすがに咎人だし。それに今回は定期的な整備に行くので余計にだそうだ。

「と、言うことは僕も整備士として行くんですか？僕、整備とか全然やったこと無いんですけど。」

「それは彼も同じだ。だが機竜使いであるんだから全くの素人よりいいだろう。」

まあそうだろう、機竜使いの歴史はまだ浅い。使い手として予備知識があるだけでも貴重なのだ。それに帝国が滅びた事により男の機竜使いも機竜整備士もほとんど死んでしまったのだ。

「それでいつ行けばいいんですか？」

「三日後に出発してもらおう。それまでに準備を済ませておいてくれ。」

「僕だけですか？」

「そうだ。まあ、お前は学校に行つてなかっただろう？いい機会だと思つてな。」

全く何て好い人なんだと思いたいところだか。

「人員が足りないだけですよね？」

「……………出発は三日後だ。忘れるなよ。」

やっぱりそうなんですな！人員が足りないですよね！と言ってやりたかったが我慢我慢。



そうして部屋を出ようとすると、

「ああ、後シャリスにもよろしく言っておいてくれ。」

「了解です。」

## 十

六日後

城塞都市

「やっと着いた。」

王都から馬車に揺られること三日と半日ようやく城塞都市にある王立士官学園に到

着した。

「機竜使えばもつと早く着くの。」

途中休憩や関所などを越えてきたのでここまで時間がかかったのだが、これでも早い方だそうだ。

「ここが王立士官学園。」

さすがお嬢様達が通う場所だけあってかなり豪華だ。

「まずは学園長に挨拶に行かないとな。」

門で衛兵に書簡を渡し学園長の部屋まで案内してもらった。

十

「学園長、お客様です。」

「王都からね。入っていいわよ。」

衛兵がをノックし、返事を聞くとドアを開けてくれた。

「始めまして、テルマ・バルトシフト君ね。」

「はじめまして、レリイ・アイングラムさん。」

レリイ・アイングラム

アイングラム財閥の長女で王立士官学園の学園長。非常に有能な人物で王女ラファイ様にもその能力を信頼されている。

「ようこそ王立士官学園へ。」

十

「なぜだ」

現在、日も完全に落ちた夜、テルマはレリイに連れられ大広間に来ていた。

「なぜこうなった。」

「あらあら、往生際が悪いわよテルマ君。」

本来ならこんなとこないてはならない。この学園では基本的に整備士などは生徒達との交流を禁じられている。ならば何故自分はここにいるのだろうか？  
時間は少し前に戻る・・・

十

「早速で悪いんだけど、ちょっと困った事になってね。」

そう言うレリイさんの顔は少しも困った感じは無くなんだか嬉しそう。

「と言いますと?」

「ルクス君、ここに通う事になったのよ。」

「ええ、知ってますよ整備士としてですよね。」

「そうそう。生徒としてね。」

「はい?」

聞き間違えだろうか?今生徒言った気が

「だからあなたが整備士として来たら監視にならないじゃない?」

「いやいやそうじゃ無くてだな。いや確かにそこも大事ですけども。」

「何がどうなつてそうなつたんですか？そもそもここ女学園ですよ。ルクスさん男ですよね。」

「色々あつたのよ。」

「どうやらルクスさんが王女様の裸を見てそれで怒つた王女様がルクスさんと勝負して、途中幻神獣<sup>アビス</sup>が乱入。ルクスさんと王女様二人で倒しその実力を認められたというわけだ。」

「なんかルクスさん大変と言うかすごいと言うか。」

「ため息混じりに返す。すると」

「ルクス君とは知り合い？」

「まあ、何度か軍の依頼もしてもらいましたし、同い年ですから、何かと話す機会も多かったんです。」

「何回か手合わせもしたし、食事にも1回行ったことがある。ここ最近は無いが。」

「へえ、そうなの。あなた軍人なの。」

「そこですか。どうやらルクスさんとの思い出話はどうでもよかつたようだ。」

「はい。」

「なるほど。その歳で軍人なら学校行って無いんじゃない？」

「まあ、そうですね。」

「ふくん。なるほどなるほど。」

なぜかレイイさんはルクスさんのことではなく僕のことを聞いてくる。そしてだんだん笑顔になってゆく。

(なんかヤバイ。)

そう思ったが時既に遅し。

「じゃあ、あなたもここの生徒として編入すればいいわ。」

「……………はい？」

何を言っているのでしょうか。僕は整備士として来たんですよ。などツツコミたいところはいっぱいあったが、

「それなら監視も楽だしいいでしょ？」

「待つてください、そもそも僕は本来整備士として……………」

「でもこの書簡にはそんなこと書かれて無いわよ。」

そう言ってレイイさんは事前に受け取っていた書簡を渡す。

内容は……………

王立士官学園長、レイイ・アイングラム様

この度咎人ルクス・アーカディアの雑用依頼が一定の期間定まると言うことで監視を付けさせて頂きます。軍人を一人送るので、同じ職業をさせて頂きますようお願いいたします。

軍副指令 バルトシフト

「……………」

つまりこれはあれですね。

「よろしくね。テルマ・バルトシフト君。」

逃げ道が無いのですね。

十

と言うことになし崩しで僕も生徒になってしまった訳ですよはい。これはあれです

ね、

(ルクスさんを恨めば良いですね。)

心の中でルクスさんに復讐を誓っていると、レリイさんが扉を開けて入って行ったのでそれに続く。

「はいみんな、ちよつといい？」

中に入るとパーティーの途中だったのだろうか皆料理や飲み物を持っている。

「実はもう一人男の編入生がいるの。今この場で紹介してもらおうわ。」

そう言うと皆は一斉にこちらを向く。

一呼吸おいて、

「はじめまして、テルマ・バルトシフトです。よろしくお願いします。」

そう簡単に挨拶する。すると皆がざわざわし始める。いくらルクスさんと同じ編入生だとしても実績のあるルクスさんとは違うのでさすがに仕方がないと思ったが、

「テルマじゃないか！」

そう声を上げたのは蒼髪の少女。テルマの姉シャリス・バルトシフトだった。



### 第3話・学園での生活

「テルマじゃないか！」

そう言って近づいて来たのはテルマの姉のシャリス・バルトシフトだった。

「シャリス姉久しぶり。」

そう言って挨拶を交わす。

「本当に久しぶりだな。元気だったか？」

「うん。シャリス姉も元気そうだなによりだよ。」

久しぶりに会ったので会話にも花が咲く。しかしここは学園の大広間で今はルクスさんのパーティー中なのだ。そんなことお構いなしに話を続けていると、

「シャリスー、その子誰？」

軽い調子で声をかけたのは明るい茶の髪に白いリボンでポニーテイルで纏めたティルファー・リルミットだ。

「ああ、すまないティルファー。彼は私の弟なんだ。」

そう言うときさまざまな反応が帰ってくる。2割が納得、その他は驚きといったところだ。納得した者はネクタイの色がシャリスと同じなので恐らく3年生なのだろう。

「さあさあ、ここからは食べながらにしましょうか。」

レリイがそう言うが、生徒達は料理を取りにいった後も色々聞いてきた。それらに答えながらテルマも料理を食べパーティーは続いた。

十

パーティーも終わった後テルマは自分の寢床に来ていた。  
シャリスと一緒に。

「テルマは上を使ってくれ。」

「いや、待ってシャリス姉、おかしいだろ。」

なんでもないかのように言うシャリスにテルマはツツコム。

「何を言ってるんだ。学園長にも許可をもらっているんだ。問題無いだろ。」

そう。学園長に部屋の場所を聞きに行ったのだがあいにく部屋が無いのでどうしようか困っていると。

「お姉さんの部屋を使えばいいわ。」

そう言うとシャリスにテルマを預けていってしまった。だからシャリスの部屋で寝ることに問題は無いのだが、

「今居ないルームメイトにんの許可も取らず、その人ベットで寝るのはまずいだろ。」

現在シャリスのルームメイトは王都へ演習に行っているなのでベットは空いているのだが、

（そもそも女子が使っていたベットで寝ることがあり得ないんだけど!?）

「大丈夫だ。彼女はかなりの男嫌いだが問題無いだろ。」

「むしろ問題しか無いだろ!？」

取り合えず床に毛布敷いて寝ることにした。

学園へ来てから数日後、テルマは初めての休日の朝からトレーニングをしていた。最近には授業など慣れない事も多かったのもうして休日にも再開したわけだ。

(よし、ノルマは終えたな。)

本当なら機竜での訓練もしたいところだが、授業以外で勝手に演習場を使えないので今日は走り込みと筋トレだけにした。

「そろそろ朝食の時間だし食堂行い。」

十

(おっ、)

食堂に行くとコックはまだ来ていなかったが生徒が二人ほどいた。一人はルクス、もう一人は、

「あ、テルマ」

ルクスはテルマに気がつくとも手招きしたのでそちらに向かいルクスの隣に腰かける。

「おはようテルマ」

「おはようございますルクスさん。あの、そっちの女の子はもしかして、」

「はじめまして、アイリ・アーカディアです。兄さんからお話は伺ってます。」

ルクスと同じ髪色の少女はそう答えた。テルマもルクスから話しは聞いていたの  
で。

「はじめまして、テルマ・バルトシフトです。よろしく。」

と返す。するとアイリは

「よろしくお願ひします。では兄さん私はこれで。」

「あれ？一緒に朝食は食べないの？もう少してコックさんも来てくれる時間だけど  
……………」

「これ以上はやめておきます。クラスのみんなに、兄さんと二人きりしているところをみ  
られたら、嫉妬されてしまいそうですから。」

冗談めかしたアイリの言葉に、ルクスは苦笑して、

「いや、さすがにそれはないでしょ。僕達……………兄弟なんだし」

「それに、これ以上一緒にいるともっと一緒にいたくなってしまうから」

「えっ…………？」

「冗談ですよ、兄さん。それじゃ、例の剣だけは抜かないように、くれぐれもお気をつけ

て」

そう言うとアイリは食堂から立ち去った。

十

アイリがいなくなったあとルクスとテルマはともに朝食をとっていた。

「こうやって一緒にご飯食べるの久し振りだね。」

「そうですね。」

他愛もない会話をしながら。しかし、不意にルクスが聞いてきた。

「そういえば、テルマはどうしてこの学園に？」

と聞いてきた。

「一応ルクスさんの監視に」

と答えさらに続けて

「ほんとは整備士の見習いとして行くつもりだったんですけど。どこかの王子様が何で

も王女様の裸を覗いたらしいんですよ。」

「へ、へえ〜」

テルマの話しを聞きながらルクスは目を泳がす。しかしテルマはそんなルクスに構わず更に

「しかもそのあと王女様と勝負したらしくて、それで……………」

「ごめんなさい。僕が悪かったです。」

テルマの話しを遮りルクスが平謝りした。

「すいませんからかい過ぎました。」

流石にやり過ぎたかと思っただのかテルマも謝る。

「でも、ほんとにごめん。」

それでもルクスは責任を感じて謝ってくる。そこでテルマは

「ルクスさんここでも雑用やってるんですよね。」

「え、うん。」

「じゃあ、相談何ですけど。」

「ありがとね、テルマ君。」

「いえいえ、これくらい」

テルマは今女子生徒の手伝いをしていた。

「そんな敬語じゃなくていいよ。同じ学年なんだし。」

「そ、そう。分かったよ。」

テルマの相談とは生徒との関わり方だった。

テルマはずっと軍に居たため女性、特に自分と同じぐらいの女子とほとんど接したことが無かった。しかし今自分の周りにはほぼ女子しかいない。そこでルクスに相談し女子との関わり方を教えてもらったのが雑用の手伝いだった。

どうやらルクスさんいわく、慣れてないだけだから慣れたら大丈夫になると言われたので、雑用の手伝いをして生徒に関わっていけばいいと言う判断だった。



「ありがとう。またよろしくね。」

「了解。」

テルマの初めての雑用は終わり女子生徒ともまあまあ上手く関わられたのでルクスの案は成功だった。

「さて、これからどうしよう?」

初めての雑用だったので比較的簡単に女子生徒とも関われる雑用ではあったが、一件だけにしたのでこれからの予定がない。

(ルクスさんは依頼で工房アトリエに行ったし。)

どうしようか迷っていると、

「テルマ」

声をかけられたので振り向くと、シャリスがいた。

「このあと時間はあるか?」

「うん、あるけど」

「なら着いてきてくれ。」

と言ってシャリスは歩き出す。それにテルマも着いていく。

「どこに行くの?」

と聞くとシャリスは振り向き答えた

「演習場だ。」

十

演習場に着くと装衣に着替えるように言われたのでシャリスと別れ、着替えてから演習場の控え室に向かうと、数十名の装衣を纏った生徒達がいた。そしてルクスもいた。

「本当に、彼を『騎士団』<sup>シヴァアレス</sup>に入れるつもりなんですか、リーシャ様？」

名前も知らない長身の女子生徒がルクスを見てそういった。

「どうやらリーシャがルクスを騎士団に入れたいらしくそのため試験を行うと言ったらしい。しかし」

「でも今は三年生達が……『騎士団』のメンバーが半数しかないじゃない。何も、そんなときに……」

「そうなの？」

「ああ、三年生はいま二週間ほど王都へ演習に行っているのさ。私はちよつと事情があつて、今回は行けなかったのだけれどね。」

「だったら三年生達が戻ってきてからでも、いいんじゃないんでしょうか？」

ルクスがそう言うが、

「それは逆だと思つたわ」

クルルシファーがルクスの疑問に反応する。

「今だからこそ、お姫様はあなたを入団させるチャンスだと思つているのよ。」

そう答えるとシヤリスが事情を説明する。

セリスティア・ラルグリス。四大貴族のひとつラルグリス家の令嬢で学園最強と呼ばれる実力者。騎士団長も務め人望も高い。しかしかなりの男嫌いでもし学園に彼女がいたら男の編入は取り消されていた可能性が高い。

つまり、

（リーシヤ様はその団長が帰ってくる前に性急に話しを進めてしまおうとしているのか。）

この学園に来てからテルマはリーシヤの大胆さに関心していた。少し王女ぽっさは欠けるが。

そこでふと気がついた。

（挨拶してないな。）

当然だがリーシヤはこの国の王女。そしてテルマは国の兵士。挨拶するのが当然なのだが学園に来てから忙しかったので怠っていたのだ。

（今からでも遅くは無いな。）

そう思いリーシヤに声をかけようとするが

「よし！　いくぞルクス！」

リーシヤは装衣に着替え終わったルクスを連れて演習場に行ってしまった。他の騎士団の生徒もぞろぞろと演習場に向かっていく。

「テルマ、私たちは観客席に行くぞ。」

まあこれだけ遅れたのなら今更ちよつと遅れても大丈夫だろう。そんなことを考えながらテルマはシヤリスの後を追った。

## 第4話・テルマVS三和音

テルマはシャリスに連れられ演習場の観客席に座り演習場の中央を見ていた。すると二人の生徒がこちらに近づいてきた。

「テルっち、となりいい?」

と言いながらテルマが返答する間もなくティルファーは隣に腰かける。答える前に座るなら聞くなよ、と言いたかったが其れよりも

「テルっちって、僕のことですか?」

「うん。そうだよ。」

いつの間にかあだ名が決まっていた。しかし余り気にしない事にした。ルクスいわく「嫌では無かったら気にしない」これも女子生徒との関わりを良くするためのスキルのひとつなのだとか。確かにルクスは幼馴染みのファイルフィのことをフィーちゃんと呼んでいた。つまり、そういうことなのだろう。テルマがそんなことを考えていると、シャリスの隣に黒髪の女の子が座った。

「えーと君は、」

「はじめましてテルマさん。私はノクト・リーフレットです。」

テルマの質問にノクトはそうかえした。

「リーフレットつてたしか……」

「Yes、リーフレット家はバルトシフト家に仕える従者の一族です。」

ノクトはそう返すが、シャリスに対する発言等からこの学園ではそんなことを気にしていないようにみえる。

「Yes、学園では家柄関係なくお付き合いしたいとシャリスに言われましたので。」

「そうなんだ。」

「テルマさんは……」

「僕もそれでいいよ」

テルマは承諾した。

「Yes、これからよろしくお願いします。テルマさん。」

「よろしく、ノクト。」

十

ノクトとも挨拶仕舞えたとところでルクスとリーシャ、それに生徒十人が機竜を纏って出てきた。ルクスはワイバーン、相手の生徒達はワイバーン、ワイアーム、ドレイクを纏っている。しかしリーシャは

「なんだ？あの機竜？」

リーシャが纏っていた機竜はワイバーンのようなワイアームのような、見たことない機竜だ。一瞬リーシャ専用の神装機竜ティアマトかと思ったが、明らかに違う。

（新しい神装機竜か？）

テルマはそう思ったが、

「あれはリーシャ様が造ったキメラティック・ワイバーンだよ。」  
「造った!？」

テルマは声をあげて驚いた。そしたらシャリスに注意された。

しかしそれも必然だろう。装甲機竜が発見されてから十年余り、未だ具体的な原理は解明されておらず改造すら難しいとされている。それをリーシャは自分で造ったと言

うのだ。

「無論造つたと言うより改造に近いがね。」

シヤリスはそう言うがそこには尊敬の念が含まれていた。テルマはリーシヤの認識を改めてなければいけないと同時に

(ヤバイ、挨拶が遅れたのが悔やまれる。怒られるかな。)

テルマがそんなことで悶々としていると、ルクスの騎士団の入団試験が始まった。

十

「なんなんだよー、もう!」

ルクスの入団試験は二対十と不利な状況を覆しルクス達の勝利に終わったのだが

「なんで一度も攻撃しないんだよ!?! 私も相手チームに入ればよかつたぞ!せつかくの



チャンスが台無しじゃないか！このバカ！」

敵を倒したのはすべてリーシャ。ルクスは回避と防御だけで試合が終わってしまったのだ。当然そんなことでは騎士団の生徒も納得出来ず多数決で賛成票を稼げなかった。

「私の作戦が失敗だったのか？それとも……相手チームの編成の問題か……だが当初の予想では……」

リーシャがブツブツと言いながら仕切りの向こうで着替え始めた。

「シャリス姉は着替えないの？」

シャリスだけではなくノクトとティルフアーも着替えていない。

「ああ、まだやることがあるからな。」

やること？とテルマは聞こうとするが、

「ルクス、追加の依頼だ。その……今から私と付き合ってくれ。」

「乗せられた。」

テルマはぼやくように呟いた。

場所は演習場の中央、そして向かいにはシャリス、テイルファー、ノクトが立っている。更にいえば3人とも機竜を纏っている。シャリスはワイバーンを、テイルファーはワイアームを、ノクトはドレイクを、それぞれ違う機竜を纏っていた。

「さあ、テルマも機竜を召喚したまえ。」

十

（30分ほど前）

結局あのあとルクスとリーシャはどこかに出掛けてしまった。すると蜘蛛の子を散らすように皆演習場の控え室から出ていった。テルマも着替えて出て行こうとすると。

「テルマ、このあと時間はあるかな？」

とシャリスに声をかけられた。時間はあつたので了承すると

「なら、騎士団の入団試験を受けたまえ。」

「……………はい？」

シャリスはそう言った。しかし騎士団の試験とはどういうことだろうか。現在演習場にいるのはテルマとシャリスだけのはず。騎士団に入団するには騎士団の生徒の半数以上の賛成が必要なのだ。

「え……………でも」

「Yes、その点は大丈夫です。」

「うおー！」

突然ノクトが声をかけてきたそれどころかいたことに気が付かなかった。

「リーシャ様はルクスさんと出掛けてしまいました但他的騎士団の生徒は演習場の観客席にいます。」

「……………なんで？」

「私が事前に知らせたからな。」

と自慢気にシャリスは言う。別に自慢できるようなことでもないがそこは言わない。それより

(僕の意味は完全に無視なのだろうか。)

明らかにテルマの意思は無視されている。しかしこうなるとやりませんとは言えない。それでも抵抗しようとするが、

「まあ、自信が無いのならやめてもいいが？」

「ボコボコにしてやるよ！」

安い見え見えの挑発にテルマは乗った。まじチヨロい。

「よっしや！ちよつと先に行つて準備運動してくるわ！」

そう言うたダツシユで演習場に向かった。

「チョロいな。」

「Yes、チョロいです。」

+

「さあ、テルマも機竜を召喚したまえ。」

そして今に至る。ここまでできたらやるしかない。それに相手をしてくれるシャリス姉達にも失礼だ。テルマは機攻殻剣のグリップを押し詠唱府を唱えた。

「ー来たれ、力の象徴たる紋章の翼竜。我が剣に従い飛翔せよ、へワイバーン」。

キーン。と、テルマの前に光りの粒子が集まった。

「接続・開始」

更に眩くと機竜がテルマの身体を覆った。

「ワイバーンですか。」

とノクトが眩く。

しかし、テルマのワイバーンはルクスのとは逆に装甲は抜き身の刃のように鋭かった。そして、手にはルクスと同じ大型のブレードが握られていた。

「双方準備はいいかな？」

審判の生徒が確認をとる。

「いつでも」

「問題ない」

「オツケー」

「Yes」

全員が返事をした。演習場が静まり返る。そして

「模擬戦、開始！」

審判の声と同時に三和音の面々は動き出そうとする………がそれよりも早くテル

マのワイバーンがスラスターを噴射し一気にテイルファーとの距離を詰めた。

「……………え？」

あまりの速さにテイルファーは一瞬固まってしまった。その隙を突いて加速した勢いをブレードに乗せてテイルファーのワイアームを切りつけた。

「テイルファー!?!」

シャリスが声をかけるが、テルマの一撃はテイルファーのワイアームを戦闘不能にさせた。

「先ずは一人目だ。」

テルマは眩き今度はシャリスに狙いを定める。

「させません。」

しかし、ノクトが機竜プレスガン息銃を放つ。テルマは後退して避けた。その隙にノクトはシャリスに近づく。

(シャリス、大丈夫ですか?)

(ああ、大丈夫だ。助かったよノクト。)

二人とも機竜にダメージはない。だが精神的にはかなり動揺していた。

テルマの機竜の腕前はシャリスは父から聞いていた。王都のトーナメントでも上位に食い込むほどの腕前を持っている。1対1なら勝てる見込みはないが3対1ならい

い勝負に持っていきけると思っていた。良いタイミングでリーシャがルクスと組んで2対10の試験をしてくれたのも助かった。

だが……………

(有利な条件だったのに開始間もなくに一人倒されるとは情けない。いや、有利と思う事でどこか油断していたのかもしれない。)

しかし、自分は騎士団で3年生なのだ。このままでは終われない。

「いくぞー！テルマ！」

シャリスはスラストアーを噴射しテルマに接近。テルマも機竜<sup>ブレスレイド</sup>牙剣を構え、迎え撃つ。  
「来なよ、シャリス姉。」

シャリスとテルマは一進一退の攻防を見せていた。シャリスの鋭い斬撃をテルマは難なくいなす。その後体勢を崩したシャリスに反撃を加えようとするが、ノクトの機竜<sup>ブレスガン</sup>息銃による援護によりそれを防がれる。

(このままでは拉致が空かない。)



テルマはノクトの機竜息銃プレスガンを避ける。そこにシャリスが斬撃を加えようとする。  
(だつたらここに！)

テルマはシャリスの斬撃を防ぐことはせずカウンターで切り返した。既に攻撃の体勢に入っていたシャリスはそのまま機竜の腕を切られた。テルマもダメージを受けたが戦いには支障はない。これでシャリスは戦闘不能。

(後はノクトだけだ。)

そう思いノクトの方を見るがノクトはどこにもいない。

(迷彩か)

ドレイクの特異性能の1つ、迷彩。ドレイクは戦闘性能が他の凡庸型装甲機竜ドラッグライドに劣る代わり、索敵、支援、補助、修復などの特異性能を秘めている。

(どこだ?)

テルマは消えたノクトを探す。だが、消えた場所を確認してないので何処にいるのか分からない。

(もらいました。)

その隙をノクトは突く。テルマの後ろから近づき一気に勝負決めようと機竜牙剣ブレイドを一閃した。

しかし、ノクトの機竜牙剣ブレイドは空を斬った。

「え？」

完全に決まったと思った攻撃が外れたことに動揺するノクト。目の前にいたテルマが突如消えたのだ。慌てて探そうとしたその時、

「チェックメイトだ。」

目の前で機竜<sup>ブレイド</sup>牙剣を突きつけているテルマがいた。

## 第5話・留学生からの依頼

「テルマ君すごく強かったね！私にも機竜の操作の指導してよ。」

「ずるい！私も私も。」

「え、えーと……」

騎士団の入団試験が終わった後テルマは女子生徒に囲まれていた。どうやら騎士団シヴァアレスの生徒以外にもテルマの入団試験を聞き付けたくらしく、ライグリー教官に交渉して入団試験を見学していたそうだった。ライグリー教官も「生徒の良い刺激になる。」と言つて二つ返事で了承したそうだった。

（それでいいのか？）

若干不安を覚えるテルマであつたが、こうして他の生徒たちと打ち解ける機会になつたのはありがたい。

「そういえばさー、テルマ君も雑用のお仕事してるんだよね？」

唐突に一人の生徒が話題を変えた。

「まあ、ルクスさんの手伝いと言いますか、なんと言いますか。」

突然だったので曖昧な返事になってしまったが、それを肯定ととらえたのか、

「じゃあ、私が頼めばお仕事してくれるんだ。よーしさつそく頼んでもいい？」  
「ずるいわ！私が先よ！」

「私も機竜操作について教えてほしいな。」

「ちよ、待つて待つて。」

続々と思いいいに皆が喋るので収集がつかない。

とそこで、

「みんなー、テルつちが困ってるでしょ。ストップストップー。」

ティルファーが皆をまとめ始めた。

(さすがティルファー、こういうときは心強いな。)

とテルマは感心していた。騎士団シヴァレスであり、三和音トライアドでもあるティルファーはこういった

まとめ事に慣れているのか率先してまとめてくれる。

(ティルファーがいてくれて良かった。)

と、思ったのもつかの間

「テルつちへの雑用依頼は紙に書いてこの箱に入れてね。そうそう、ルクつちの時と同じで。」

「おiiiiiii!?!」

思わず変な声が出てしまった。見ると、どこからか出した箱の中に大量の依頼書が詰め込まれている。

「大丈夫だよ皆ちゃんとお金も払うしテルっちもお小遣いもらえていいでしょ！」

別に悪くは無いのだが、流石にこの量となると、と悶々としていると。

「あー、やっぱりテルっちには無理かもね。ルクっちは雑用やってたけどテルっちやつて無かったもんね。ごめんごめん。じゃあこれはルクっちのところへ………」

「大丈夫だ、問題無い。」

そう言ってさっそく依頼書を整理し始めた。

「ほんとにチョロいなー（笑）」

十

「つ、疲れたー。」

結局あのあとテルマはいくつかの依頼をこなした。どれも軽いものだったが、いかにせん入団試験の後だったのでかなり疲労が溜まった。最後の依頼を終えベンチにぐたーと座っている。

「これから毎日大変だな。」

嫌ではない。しかし如何せん慣れてない事が多いので大変なものには変わりはない。ルクスと違いテルマは軍にいたのでこういった雑用には慣れていなかった。今日ももう部屋に戻って休もうと思いい、ベンチから立とうとすると、

「少しいいかしら？」

一人の少女が声をかけてきた。

「あなたは……」

「こうやって挨拶するのは初めてね。クルルシファー・エインフォルクよ。」  
 クルルシファー・エインフォルク

雪の大国ユミル教国の留学生でエインフォルク伯爵家の令嬢。勉学も体技も<sup>ドラッグライド</sup>装甲機竜の操作も一流の異国の少女と、ルクスから聞いている。さらに完璧な美術品の  
 ような美貌、非の打ち所が無い。正に完璧と言える。唯一あるとすれば……

「今失礼な事考え無かった？」

「めっ、滅相もございませぬ！」

恐怖を感じ即座に謝罪の言葉をいれた。恐ろしい。口には出していない。それなのに  
 に勘づかれた。女性に身体的特徴（どこがとは言わない）を考える事も<sup>タブー</sup>禁句と改めて学  
 んだ。

「それで、何の依頼ですか？」

「察しが早くて助かるわ。テルマ君、「黒き英雄」を知ってる？」

黒き英雄

たった1機の正体不明の<sup>ドラッグライド</sup>装甲機竜を使い帝国の<sup>ドラッグライド</sup>装甲機竜約千二百機をほぼすべて全  
 滅させた怪物。その<sup>ドラッグライド</sup>装甲機竜の色と帝国を滅ぼした事からこの名がつけられた。新王  
 国では伝説の英雄として語り継がれている。

「まあ、噂程度なら。」

嘘である。英雄の正体がルクスであり装甲機竜ドラッグライドの名前はバハムート。特殊武装も装甲の名前も言える。

「そう。」

クルルシファーはそう答えた。しかしどこか信じていないそんなニュアンスが含まれている。

「私の依頼は「黒き英雄」を探してほしいことよ。」

やっぱりか、とテルマは思った。話の流れでそうでは無いかと思ったが、「理由を聞いてもいいですか？」

彼女がどういった理由で「黒き英雄」に会いたいのかわからない。だが少なくとも憧れだからとかそういう類いのものではない。かといって恨んでいるという感じでもない。彼女の真意が分からない以上そう易々と受ける訳にはいかない。

「用があるのよ。内容は言えないけど。」

やはりはぐらかされてしまう。

ならば、

「分かりました。でもなんで僕に？ルクスさんの方がいいのでは？」

ルクスはこの学園に来る前城塞都市クロスフィードであらゆる国民の雑用を受け持っていた。聞いた噂も多いだろう。



「もちろんルクス君にも頼んだわ。でも、貴方の方が知ってるかと思つてね。」  
「何故？」

「私の推測だと「黒き英雄」は何らかの理由で表に出て来られないのでは無いかしら。そしてそれを隠せるほどの権力となると王国で庇っている。そうなると王国の軍所属である貴方は何か知らされていると思つてね。」

すばらしい推測だとテルマは思った。殆ど当たっている。

「嫌だな、僕は只の兵士ですよ。」

「只の兵士が機竜3体相手に勝つてしまふなんてないと思うんだけど。貴方軍の中でもトップクラスの使い手何じや無いかしら？」

またしても鋭いところ突いてくるクルルシファー。弁論では彼女の方が勝っている。  
(不味い。)

テルマはこういった駆け引きが苦手だ。このままでは確実にボロを出してしまう。どうかして話題を変えられないかと思つていると、

「安心して。言いたく無いことまで言わせようというつもりは無いわ。」

と返つてきた。話題が終わりほつとしたテルマであったが、同時に

(言いたく無いことまで言わせる気は無い。つまりある程度僕が知っていると確信したわけだ。)

本当に食えない人だ、とテルマは思った。

「それじゃ依頼よろしくね。」

そう言つてクルルシファーは去つていった。

十

クルルシファーと別れてテルマは応接室の前に来ていた。本来シャリスと同じ部屋で寝ていたテルマであるが、今日はあまりにも色々ありすぎたため床で寝ても疲れが取れないと踏んで、今日は応接室で寝ることにした。テルマがドアを開けようとすると、

「僕は……駄目だな………」

中からルクスの声が聞こえてきた。いつもよりいくぶん沈んだ声だった。  
「ルクスさん？」

「……………テルマ」

テルマが中に入ると、ルクスはソファア―に寝転んでいた。

「何かあったんですか？」

「……………ちよつとね。」

とても聞き出せるような雰囲気では無い。

「分かりました。なら、失礼しますね。」

「あ、大丈夫だよそんな気遣わなくても。」

「いいですよ。今は誰とも会いたくない。そんな顔してますよルクスさん。」

何も聞いてあげる事が気遣いでは無い。ほつておいてほしい時だってあるのだ。テルマはルクスからそう感じ取った。

「……………ありがとう、テルマ。」

その言葉を聞いてテルマは応接室を出ていった。

恐らくリーシャと何かあったのだろう。だがリーシャとルクスはまだ知り合ったばかり。これからいくらでも仲直りできる機会はある。

……………だがそんなテルマの思いとは裏腹に闘いは次の日にやって来た。

早朝

ゴオオオン！

突如、敵の襲来を告げる警報が鳴り、朝の鍛練をしていたテルマは機竜格納庫へ急いだ

## 第6話・幻神獣の襲来

「では、全員が揃ったところで士官候補生の諸君に通達する。」

警鐘の理由は幻神獣アビスの出現によるもの、報告によると種類は大型の一体。

「現在、第2、第3の砦に常駐している、警備部隊の機竜ドラグナイト使い数名が討伐に向かっている。だが、敵は大型だ。突破され、城塞都市にまで被害が及ぶ可能性に備え、我々も迎撃部隊を編成し、戦闘に備える。各自、指令があるまで準備を整え待機せよ。」

いつになく真剣な声音ライグレイ教官の話は終わった。既に王都にも救援要請を出しているとの説明があつた。何人かの生徒はそれを聞いて、ほっと安堵のため息をついていたが……

「随分と平和ボケしているわね。この学園のお嬢様たちは」

「え………?」

格納庫の壁際に佇んでいたクルルシファアの呟きにルクスは思わず聞き返した。

「王都からの応援なんてそう簡単に期待できるものではないはずよ。」

「どういうことですか?ここにいるみんなは士官候補生でしょう?王都からの機竜ドラグナイト使いが来てくれないこととは………」

「その説明は僕がしますよ。」

装衣に着替えたテルマがルクスのそばによつてきて

「新王国が誕生してからまだわずか五年。今の王国は四大貴族の協力がなければ成り立たない状態です。そんな内政をしつかり確立されていなので軍直属の機竜使ドラッグナイトはそんなに多くありません。僕が一人でルクスさんの監視に来ているのがいい証拠ですよ。」

最後はため息まじりにテルマが言う。

「声が大きいよ、テルマ。」

不意にやつて来たシヤリスが口元に人差し指をたて、苦笑いする。

「君も一応は元王子で機竜使ドラッグナイトいだ。この国の軍事情勢について、その辺の事情は知っていると思つたんだかね」

「要するにさー、人手が足りないんだよ。テルうちの言う通り」

傍にいたティルファアが、肩をすくめつつそう言う。

「Yes. ここが只の都市で無いことは貴方もご存じのはずです。」

そしてノクトも言葉を添えると、ゆっくりと外へ出る扉の方へ歩いて行く。

「どこへ行くつもりですか?」

「我々は騎士団シツァレスだからね。有事の際には率先して出張らないといけないのさ。ここに所

属すれば、確かに厚遇を受けられるが、何も楽しい話ばかりじゃない。」

シヤリスがくすりと笑顔を返し。そのまま3人は出ていった。恐らくは演習場で機竜を纏い、そのまま幻神獣アビスの討伐へ向かうのだろう。

「おいルクス。それじゃ、行ってくるぞ」

ほんと手を肩な置いてきたのは、装衣を身に纏ったリーシャだった。

大型の幻神獣アビスの襲来、

その緊迫した状況でもリーシャは余裕の笑みを浮かべていた。

「気をつけてください。」

「大丈夫だ。私は強いからな。本当ならお前を連れていって攻撃の仕方を教えてやろうと思っていたのだから」

昨日の落ち込みなど無かったかのようにリーシャは笑顔を見せる。ルクスは安堵してリーシャを見送った。

「君も行くの?」

ルクスは振り返りテルマにたずねる。

「僕は軍の機竜ドラッグナイト使いですから、当然いきますよ。」

淡々とそう返す。

「何か気になることでも?」

ルクスはテルマが行く事を分かったうえでそう聞いたのだろう。ルクスには他に気になることがあった。

幻神獣<sup>アビス</sup>の出現頻度はかなり低い。ルクスも遺跡<sup>ルイン</sup>の警備を雑用でしたことはあるがそのときは一月で幻神獣<sup>アビス</sup>は一体しか出て来なかった。しかしこの短期間に二体。しかも騎士団<sup>シヴァレス</sup>の3年生が殆どいなくて戦力が半減しているこのタイミングで。もちろん偶然の可能性もある。それでもルクスには何か引つかかっていた。

「ルクスさん？」

いつまでも考え込んでいるルクスにテルマは肩に手を置く。

「ルクスさん、考えてる事は大体分かります。でも今は行くしかありません。」

テルマはそう言うのと格納庫から出ていった。

「テルマ、気をつけてね。」

ルクスもテルマを見送った。

「何か気になることでもあるのかしら。」

テルマの姿を見送っていたルクスを見て、クルルシファーが尋ねてきた。

「……………いえ、それよりクルルシファー<sup>シヴァレス</sup>さんは騎士団<sup>シヴァレス</sup>なのに討伐に行かないの？」

「私のような留学生は、校則で独自の戦闘基準が定められているのよ。」

クルルシファーの話によると、留学生は危険な戦闘には参加せず情報伝達や物資補給



といった支援を協力するそうだ。勿論自ら望めば戦闘も協力できる。

だが基本的にクルルシファーは幻神獣アビスとの戦闘では戦力に数えられないことになる。つまり騎士団シヴァレスのみんながそれだけ危険にさらされることになる。

「別に気にすることないわ。」

「え……………?」

「私たちは今戦うべき人間じゃない。そういう状況も起こって当然だもの。あなたは騎士団シヴァレスに入団してもいない一般生徒。だから戦えない自分のことを気にする必要なんてないわ。後は教官の指示に従うのね。」

「……………」

ルクスは何も答えられなかった。

「兄さん、行っちゃ駄目ですよ。」

ルクスが人だからから離れると、アイリが目の前にやってくる。

「あの《ワイバーン》では攻撃できませんし、もう一方の剣も使えない。今の兄さんにできることなんて何も無いんです。リーシャ様と騎士団シヴァレスそれにテルマさんっていう軍人がいれば大型の幻神獣アビスが相手でも倒せるでしょう。ですから……………」

「分かっている。分かっている、けど……………」

どうしても拭いきれない不安がルクスにはあった。

そんなことを考えてるとクルルシファーは行ってしまった。恐らく支援目的だろうが。

ルクスはやもやしたままクルルシファーを見送った。

十

城塞都市クロスファイードから三キロほど離れたただっ広い荒野。そこで大型の幻神獣アピピスはいた。既に第1の砦第2の砦は突破されていた。

「こいつが例の幻神獣アピピスか。」

知性を持たないスライム型。

しかし大型と情報通り、城をひとつ飲み込む程の大きさを持っていた。

これほどの大型の幻神獣アピピスどうやって攻略したものか

「よし、ぶつ放すぞ」

リーシャが機竜息砲を構え幻創機核からエネルギーを送る。

「いきなり撃つ気ですか!？」

背後にいた騎士団の一人が怯えたようにそう叫ぶ。

「やってみなくちゃ分からないだろ。お前もそう思うだろ?」

同意を求めるようにリーシャはテルマの方を向く。

「そうですね。撃つことに問題はないです。しかし全員リーシャ様が撃ったあと直ぐに動けるように準備をお願いします。」

攻撃の直後は隙が生まれやすい。テルマは竜声で全員に通達する。

「行くぞー!」

リーシャの機竜息砲から放たれた光弾はスライムの土手っ腹に命中した。

「ゴボオ……………グバアッ!」

直後、衝撃が幻神獣の体表を波打たせる。そしてその粘液がドバツと飛び散ると草を一瞬で溶かしてしまった。

「ヤツの身体に触れると、ああなってしまうようだね。機竜の障壁もあまりアテにしない方が良さそうだ」

「Yes. 接近戦は避けた方が身のためです。全員、射撃武装の用意をすべきかと思えます。リーズシャルテ様。」

ノクトがシャルリスの意見に同意し、指示を仰ぐ。

「ちよつと!?!そんなことより、見てよアレ!?!」

リーシャの返事をテイルファーが遮る。そしてテイルファーが指す方向を見ると。

「ゴポツ、ゴポポポポ……」

機竜息砲を意に介さず幻神獣は進撃を続けていた。機竜息砲で空いた穴ももの数秒で埋められてしまった。

「どうやらあの粘液全体で威力を拡散しているようですね。」

テルマは冷静に幻神獣の分析をする。

「で、作戦はどうする? 部隊長殿」

「決まっている。核目掛けて主砲での一斉射撃だ。全員200メートルの距離をとって、エネルギーを最大充填しろ。秒読みは私がやる。いいな?」

竜声を使って騎士団全員に指示を飛ばす。そして自らの機竜息砲にもエネルギーの充填をはじめぬ。

(これで確実に倒せる。私たちの勝ちだ)

十数機の機竜使いから放たれる集中砲火。先ほどの機竜息砲での攻撃からみてこの

威力なら確実に核に届く。

「秒読みを始める。ゼロで総射だ5、4、3……………」

リーシャの指示で全機が最大充填した機竜息砲キヤノンを構える。

「2、1、発射ー！」

ーイイイイイイイイイ！

そのとき、奇妙な笛の音が辺りに響いた。

そんなこととは関係なく、一斉射撃の衝撃が大気を震わせる。

同時に目の前の幻神獣アピスに異変が起こった。

核が急激に膨れ上がり

「ゴアアアアアアアアア！」

直後、砲撃が当たるより先に幻神獣アピスが自ら弾け飛んだ。

核の爆発。

予想を遥かに上回る高熱と衝撃が視界ごと塗り潰して押し寄せる。

「障壁展開だ！機竜咆哮ハウリングも使えー！」

リーシャの叫びが轟音にかき消されて吹き飛んだ。

## 第7話・王女の覚悟

幻神獣アビスと交戦していた騎士団シヴァレスの部隊は半壊状態に陥っていた。

「くああ……………」

「う……………くつ、あ……………」

酸で装甲の一部が溶ける。武装を盾にしたメンバーも多くその殆どは使い物にならなくなっていた。

「みなさん！大丈夫ですか！」

テルマのワイバーンが地上に降り竜声を使って全員に声をかける。ほぼ全員負傷していたが、死者は無かった。

「……………くツ！騎士団シヴァレスの小隊は全機退避だ！一度体勢を立て直す。武器が使えない者は一旦下がれ！」

「リーズシャルテ様」

全機に指示を出すリーズシャにテルマが近づく。

騎士団シヴァレスの戦力の内ワイアーム、ドレイクの機体は全機に損傷があり交戦可能なのは全体の6割。しかし全体の9割が何らかの武装が使えないもよう。ワイバーンはほぼ全

機が交戦可能です。」

もろに酸を浴びたのはドレイクとワイアームのみ。ワイバーンは衝撃で地上に落とされたがそれ以外の被害は無かった。

その報告を聞きリーシャは、

「まだ十分に交戦可能だ！狼狽えるな！」

と仲間たちに声をかけ、鼓舞する。

だが

「ほう、随分と王女ヅラが板についてきたじゃないか、リーズシャルテよ」

「……………!?!」

ふいに聞こえたしわがれた男の声。竜声を使ったその声は騎士団シヴァアレス以外のもの。新王

国警備部隊の機竜ドラッグナイト使い。灰色の機竜を纏った男が幻神獣アペリスの後ろ上空に佇んでいた。

「だがな、お前はそんな器ではない。そのような誇りなどないのだよ。」

「貴様、何を言ってるッ……………!?!」

不遜な声の直後、その機竜ドラッグナイト使いから閃光がリーシャに向かって放たれた。

「部隊長！」

「姫様！」

騎士団の悲鳴が竜声越しに木霊する。完全に虚をついたタイミング。

だが

「させない。」

側にいたテルマがリーシャの前に出て機竜<sup>ブ</sup>牙剣<sup>ド</sup>で砲撃をいなす。

「どういうつもりでしょうか？警備部隊の隊長が姫に向かって牙をむくというのは？」

静かだが怒気を含んだテルマの声。

しかし、

「それは間違いだ。王都の犬よ。」

淡々とリーシャに対して詫びることもなく、

「私は帝都から来たのだ。アーカディア帝国近衛騎士団長ベルベット・バルトが、私の名

前だ。」

「ッ……………!?!」

その一言に騎士団<sup>シヴァレス</sup>の一同が、はつと息を呑む。

帝国側の機竜<sup>ドラグナイト</sup>使いは戦犯として一度牢に入れられたが、中には新王国へ忠誠を誓い再

び機竜<sup>ドラグナイト</sup>使いになった者も少なくない。

だが、

「新王国を裏切ったということですか？」

「裏切ったなどと人聞きの悪い。王道に立ち返ったのだよ。力を得てな。」



勝ち誇ったように話すベルベット。

「不意打ち一発で勝てると思っただか？ 傲慢は身を滅ぼすぞベルベット。」

リーシャが悠然と返す。確かにベルベットが連れてきた幻神獣は騎士団にダメージこそ与えてはいるが、倒せてはいない。それに幻神獣はドロドロに崩れていて戦える様子ではない。

それでもベルベットは余裕の表情で、

「勝てますとも。こうして貴女を誘きだしたのも勝算があつての事ですから。」

そう言うのとベルベットは小さな黄金の笛を手にとった。

「さあ、孵れ、卵よ」

そして酷薄な笑みを浮かべて笛を口に当てる。聞いたことの無い不協和音が辺りに鳴り響いた。

直後

破裂してドロドロになっていた幻神獣から小さな泡がぷつぷつと浮かぶ。それらは高速で大きくなり弾けた。

「あれは………?!」

騎士団のメンバーもテルマも驚愕に目を見開く。

出てきたのは、ガーゴイル。

しかも一匹では無く群れで、幻神獣アピスが生まれた。その数およそ30体。

「ちよ、ちよつと待つてよ……………」

「あんな数……………！私たち2体以上の幻神獣アピス、同時に戦ったことも無いのに……………」

「どうしよう……………聞いてないよ、こんなの」

「そもそも、軍の警備隊まで敵だなんて」

絶望の声が竜声で重なりあう。無理もない。ガーゴイル30体。一人前の機竜ドラグナイト使いに換算すると約百二十機越の敵戦力なのだ。恐怖に支配されても仕方が無い。

「騎士団シウアレスのみなさんは撤退してください。時間は僕が稼ぎます。」

だからテルマの指示は完全に予想外だった。

「何を言ってるんだテルマ！」

シャリスが竜声で声をあらげる。

「そーだよ危険だよ！」

「Yes.死ぬつもりですか。テルマさん。」

テイルファー、それにノクトがシャリスに同意する。幻神獣アピス30体に対して機竜ドラグナイト使い

一人とはあまりにも無謀すぎる。

だが

「彼の裏切りは軍の責任です。なら責任は軍人である僕が取ります。」

「テルマもまた強い意志を示した。それだけに先ほど声をあげた三和音トライアドも何も言えない。」

「リーズシャルテ様、後の指示を……………」

「―目覚めろ開闢の祖。一個にて軍を為す神々の王竜よ。へティアマトへ！」

だが撤退させようとしたリーシャがへキメラティック・ワイバーンを解除しへティアマトを纏った。

「リーズシャルテ様、何をなさってるのですか？」

「残念だけど撤退は無理そうだ。敵は翼を持つている城塞都市クロスファイードの中に逃げても壁は越えられてしまう。なら、ここでやるしか無いだろう。」

「そのための時間は僕が稼ぎますから、だからリーズシャルテ様……………」

「それは私が王女だからか？」

唐突に

テルマの言葉を遮ってリーシャは尋ねた。

「生き延びることも王女の責任、ということか？」

「……………」

はつきり言ってしまうばそう言うことだ。やっと平和を手にした新王国のためにここでリーシャが死んでしまうのは良くない。それこそ反乱軍に勢いを与え、新王国の

人々に恐怖と悲しみを与えてしまう。もつと言えば最悪リーシャだけが生き延びればいいとも思っている。だがそれを口には出せない。

「やっぱり私には王女なんて向いてないな。」

そう一言寂しげに呟いて、

「面倒なんだよ。苦手なんだ。誰かを犠牲にして生き残って、誰かの死を英雄として称えて、残った市民に演説のひとつでもして、拍手を浴びるなんてさ。」

「……………」

「だから私は戦うよ。きつとそれが私に出来る姫としての使命なんだ。」

言い切ると同時にリーシャの〈ティアマト〉が飛翔する。それに合わせてテルマのワイバーンも飛翔する。

「どうした？まだ私を止めるか？」

「止めませんよ。」

どこか呆れたようにテルマは呟く。別に悲観したわけではない。

「こうなった以上貴女に従います。部隊長殿。」

そう言ってテルマは武装を構える。それを聞いてリーシャはふつ、と笑みを浮かべて

「騎士団総員に告ぐ。これより敵と交戦にはいる。戦闘不能者及び負傷者は城壁内に待避。戦えるメンバーは私の援護だ。《空挺要塞》に当たらないようにすこし引いておけ。」

「リーズシャルテ様……………」

その口調に覚悟を感じとった騎士団のメンバーも自然と落ち着きを取り戻していた。

「ノクト、お前は城塞都市に戻り、学園にこのことを伝えて指示を仰げ。出来るか？」

「Yes. 了解しました」

返事の直後、ノクトのドレイクが城塞都市に向かって滑走する。

同時に騎士団のメンバーが残りの武装を構えた。

「さあ、遊んでやるぞ？ 反逆者ども。」

「二度目の反逆はの罪は重い。死ぬまで牢屋の中ですよ。」

リーシャは《空挺要塞》追加十二機と七つの竜頭を召喚。

テルマは可視出来るほどのエネルギーを機竜牙剣に流した。

「口の減らない奴らだ」

ベルベットはそう吐き捨て再び笛を口に当てた、

## 第8話・黒き英雄

荒野での戦闘は熾烈を極めていた。合計30体もの幻神獣アビスの猛攻。何故か幻神獣アビスに襲われないベルベットはその笛を使って幻神獣達を操っているように見えた。

「くっ……………はあー！」

リーシャは息を荒げて、四肢の各部に力を込める。

合計十六機の《空挺要塞》レギオンで相手を攪乱し、重力制御の神装《天声》スプレッシャーで動きを封じ最後に《七つの竜頭》ゼブンスヘッズの最大砲撃で確実に葬る。そんな極限の戦闘を続けていた。

またテルマもリーシャ達から少し離れた場所で戦っていた。

テルマの戦闘スタイルはワイバーンによる高速移動と大型ブレードによるヒットアンドアウェイ。故に援護射撃などをされると誤射されてしまう可能性が高い。故にテルマは戦闘に入る前にリーシャにその事を告げ一人で幻神獣アビスと戦っていた。

しかし、

(数が多すぎる。)

テルマが引き受けた幻神獣アビスは七体。もちろん一人ですべて倒しきるつもりだ。だが攻撃を当てようにも連係されてこちらが攻撃をするタイミングで死角から攻撃してく

る。

「厄介だな。」

幻神獣<sup>アビス</sup>の中でもガーゴイル種は高い知能をもつ。奇襲だけでなく、戦術レベルの駆け引きまで用いてくる。さらにベルベットの笛のせいも関係までしてくる。一編に相手にするのはよろしくない。

「だったら」

テルマはワイバーンの推進機能を使って急上昇する。それによって幻神獣<sup>アビス</sup>の包围を一旦抜ける。

しかしガーゴイル達も逃がすまいと同じく上昇してテルマを追う。

（かかった。）

追ってきたガーゴイル達を確認すると上昇を止め一気に降下する。自由落下と推進機能を使つての急降下。幻神獣<sup>アビス</sup>も急に迫ってきたテルマをみて上昇を止めるが、

「甘い」

すれ違い様にガーゴイル一体を最大出力の機竜<sup>ブレイド</sup>牙剣で一刀両断。一体を仕留めた。

（あと六体）

そう思いテルマが通りすぎたガーゴイル達を確認しようと上を向いたとき、

「ッ！」

テルマの上にいたガーゴイル達が両翼を開き羽型の光弾を放ってきた。六体から放たれる濃密な弾幕。テルマは防御では無く回避を選択した。テルマのワイバーンはスピードに重きを置いている。故に障壁の出力が普通のワイバーンと比べて低い。この弾幕では間違いなく障壁は破られてしまう。

また回避しながら接近する事で攻撃のチャンスを伺う。

(けど、この数はヤバイ)

いくらスピードに重きを置いているといつても限界がある。ある程度被弾しながら、けれど致命傷は避けてガーゴイル達に迫る。

そして

「はあああー！」

弾幕を抜けテルマは機竜<sup>プレード</sup>牙剣でガーゴイル一体をぶった切った。

「あと五体ッ……………」

ガキン！と

テルマのワイバーンを何かが拘束した。

「ッ……………！ガーゴイル」

見ればガーゴイルがワイバーンを羽交い締めにしていた。そしてテルマの前にいる四体は一斉に両翼を開く。



(こいつら、味方ごと)

いや、そもそも幻神獣<sup>アビス</sup>に仲間意識があるのか分からない。ガーゴイル達は羽型の光弾をテルマに向かって放った。

「機竜咆哮!」  
ハウリンググロア

テルマはとつさに機竜咆哮<sup>ハウリンググロア</sup>を使い、羽交い締めしていたガーゴイルを引き剥がす。

なんとか引き剥がしたが既に光弾は目の前に来ている。テルマは障壁と機竜咆哮<sup>ハウリンググロア</sup>は張りさらにスラストで大きく回避するが。

「くっ………そー!」

テルマを羽交い締めしていたガーゴイルはバランスを崩して光弾をもろに食らい死んだが。テルマも回避しきれない。何発かは装甲を破壊する。それでもなんとか弾幕を抜けガーゴイルと距離を取る。

「ヤバイ。けっこう入ったな。リーズシャルテ様達大丈夫か?」

とリーズシャルテの方を向くと

「リーズシャルテ様!?!」

見ればリーズシャルテは《ティアマト》を纏ったまま地面に倒れていた。《ティアマト》の装甲もボロボロだ。

「くそー!」

テルマはリーシャの方へ行こうとワイバーンを動かす。だが行く手をガーゴイルに阻まれてしまう。

「どけー」

それでも構わずテルマはガーゴイルの群れに飛び込む。ガーゴイル達も行かせまいと光弾を放ってきた。右へ左へ最小限の動きで致命傷を避けるテルマだが、突如左目の景色が赤く染まった。

「!？」

テルマは頭から血を流していた。恐らく光弾の一つが頭をかすつたのだろう。一時的に左側の視界がきかなくなつたテルマに光弾が襲い掛かる。なんとか回避を試みだが視界が半分きかない状態では避けきれず、障壁は破られて、装甲も左足と左腕が吹っ飛ばされた。

「があッ……………」

バランスを失い自由落下を始めるテルマ。辛うじて機竜は纏っていたがこのまま落ちれば重症だろう。

(情けねえ)

落ちながらがテルマは自分の情けなさを嘆いた。騎士団シヴァレスのみんなも救えずリーシャもリーシャも救えない。情けない話だった。

だが不意にテルマの機竜が抱き止められた感じがした。

「……………クルルシファーさん？」

「大丈夫かしら？」

幻覚かと思つたがリーシャの方にもワイバーンを纏つたルクスがいた。

そしてすべてを悟つた。ルクスが助けに来たのだと。

十

「一顕現せよ、神々の血肉を喰らいし暴竜。黒雲の天を断て《バハムート》！」

直後、現れたのは黒の神装機竜。禍々しい殺気と光沢を帯びた、ミスリルダイト幻玉鋼鉄の塊。

神装機竜《バハムート》が姿を表した。

「何者かは知らんが、構わん！たかが一機だ！まとめて始末しろ！」

ベルベットの指示で最初の三機がルクスに襲いかかった

その刹那

バキン！

「ーえ？」

ルクスが襲いかかった三機が弾け飛んだ。

「な……………に……………!?!」

何が起こったか分からなかった。ただ目にも止まらぬ速さで《バハムート》が大剣を振るい、剣を交えた瞬間勝負を決めたのだ。

《暴食》  
リロード・オン・ファイア

状況を理解させる前にルクスは三機を叩き伏せた。

「く……………!?!」

「ど、どういうことだ、あれはー!?!」

「何が起きている、一体、何が」

「あ、あれは神装機竜なのか……………!?!何故、ああも軽々……………!?!」

何機で行っても一瞬の内に破壊されてしまう。剣を振るうより、銃のトリガーを引くより早く、一瞬の下に叩き伏せられる。まるで悪夢のような光景に反乱軍の機竜使ドラッグナイトいはどよめいた。

「う、狼狽えるな！奴は所詮、俺たちと同じ男の機竜使ドラッグナイトいだ！」  
ベルベットが声を張り上げ部下たちを叱咤する。

「奴に……男に長時間、神装機竜を扱えるほどの適性はないはずだ！それにヤツは攻撃の直後、必ず動きが鈍っている！その隙をつけ！」

「はー！」

隊長の指示を受けた機竜ドラッグナイト使い達がルクスを囲み再び襲い掛かる。確かにルクスは《バハムート》の操作に疲れたように、数秒その動きを緩めていた。

「ぐああああつ?!」

だが、動きが遅くなり、隙を晒したに見えた次の瞬間。間合いに入った七機の帝国の機竜を、一瞬で粉碎した。

「……馬鹿なツ?!」

再び動揺が、帝国軍の機竜ドラッグナイト使いたちに走る。

「漆黒の神装機竜だと……。貴様……！まさか、お前がーあのクーデターの……!?!」

「以外と早く会えましたね。」

クルルシファーに助けられ地上に降りたテルマはそう呟いた。頭には包帯が巻かれている。

「・・・あなたは知っていたのね。」

「すみません。嘘をついてしまっただけ。」

「別に気にしていないわ。それに言ったでしょ、言いたくないことまで言わなくていいって。」

気にしてないそんな意味をこめたような口調だった。

「クルルシファーさん、このことは内密に・・・」

「ええ、分かっているわ。そのかわり彼の機竜の性能を教えてくださいませんか?」「僕の知っている範囲で良ければ。」

テルマは一呼吸おいて、

「リロード・オン・ファイア暴食それがルクスさんの神装の名です。」

リロード・オン・ファイア

## 暴食

圧縮強化という能力で十秒間の魔法。先の五秒間で、エネルギーや数分の一に激減させ、後の五秒で、その力を爆発させる能力。

「ルクスさんはその能力を使い斬撃を加速させ相手の攻撃を追い抜き破壊する。「即撃」というルクスさんの技です」

## 十

三十機、四十機、五十機と次々と敵の機竜ドラグナイト使いを破壊してゆくルクス。そしてベツト以外の機竜ドラグナイト使いを破壊しつくした時、

「あの世で皇帝陛下に詫びろ裏切り者！」

ベルベットがルクスの神装の間隙を狙って斬りかかる。並の攻撃ならルクスには当たらないがベルベットには切り札が合った。

クイックドロウ  
神速制御

肉體操作での制御に加え、精神操作の制御。一連の操作に、異なるに二系統からの操作完璧に重ねることで、ほんの一瞬、一動作のみ、目にも止まらぬ攻撃を繰り出す絶技。クイックドロウ  
神速制御による不可避の斬撃をあげせよとしたその時、

「なっ!？」

バキイン!

ルクスを攻撃したはずの機竜の腕が破壊された。いや腕だけではない。幻創機核<sup>フォースコア</sup>として機攻殻剣<sup>ソード・デバイス</sup>までもが破壊された。

「な、何故?」

混乱しているベルベットだが、ルクスは暴<sup>リロード・オン・ファイア</sup>食を使いベルベットの機竜を破壊する。

「僕はここで戦います。僕が王子だった帝国じゃなくて、あなた達じゃなくて。僕が認められたいと思う彼女たちのために……………」

ベルベットが地に落ち、戦いは終わった。



「帝国の三大奥義、それらすべてはルクスさんが生み出したものなんです。」

ベルベットを倒したあと、ルクスは気を失い運ばれた。同じく騎士団シヴァレスの生徒も治療のために戻った。テルマも治療が必要だが応急処置をしているだけになっている。クルルシファーも今回の反乱軍の引き渡しのために後始末を手伝ってくれていた。

「それで「黒き英雄」に会えて目的は達成できましか？」

「そうね。半分は、と言ったところかしら。」

後始末も終わり学園への帰りにテルマはクルルシファーに尋ねていた。

「半分は、ですか。」

「なんだか曖昧な返事にテルマは苦笑する。」

「確かに半分だけれど、それでも大きな成果だわ。」

クルルシファーは満足そうにそう返し、

「それにしても、彼は随分損な性格をしているのね。」

話題はルクスの話に切り替わる。

確かに結果だけ見ればルクスだけでもよかったかもしれない。だがもしベルベツト達がリーシャたちを狙ったら自分は気兼ねなく戦えなかったかもしれない。だからクルルシファーに同行を頼みその守護を任せただ。全力で守るために。

「まあ、それがルクスさんの良いところでもありますから。」

笑って答えるテルマ。クルルシファーも呆れたように笑った。

「じゃあ急ぎましょうか。もうすぐ暗くなりますし」

「そうね。」

こうして戦いは終わった。

## 第9話・王子の居場所、軍人の居場所

「ふ、ふあゝ……………」

欠伸と共にテルマは起き出す。まだ朝日が昇つて間もない頃に。今日も朝のトレニングに向かおうとするのだが、

「つ……………」

体を起こすと頭に痛みがある。昨日の戦闘で頭から出血していたのを忘れていた。

(てゆうか、ここよく見たら医務室じゃん。)

昨日は帰ってきて医務室に直行したあとそのまま眠ってしまったようだ。頭の包帯も昨日のまま替えてない。

(とりあえず包帯だけは巻き直そうかな。)

なんとかベッドから体を起こし包帯を探しだそうとしたとき、

「失礼します。」

ドアを開けてアイリとノクトが入ってきた。こんな朝早くに来たというのに二人とも制服姿だった。

「やはりシャリスの読み通りでした。テルマさん何をなさっているのですか？」

「なにつて、包帯を巻き直そうと……」

「なるほど。それなら私が手伝いをしましょう。座って下さい。」

そう言うのとノクトはテルマをベッドに座らせ、自分はテルマの後ろに座り包帯をほどき始めた。

「あー、あのさノクト、それくらい一人でもできるよ?」

「No. シヤリスから聞きましたテルマさんなら怪我をしても朝のトレーニングに向かつてしまうと。なので、テルマさんが無茶をしないようにこうやって朝早くから来たのに、はあ。」

「……………」

凶星を突かれたテルマは何も言えず、てきぱきと包帯を替えるノクトにされるがままになっていた。

「これで、大丈夫です」

「ありがとう、ノクト」

どこで覚えたのかテルマがやるよりもきっちり巻かれていた。

(これならちよつとぐらいトレーニングしても大丈夫かな?)

テルマはベッドから立ち移動しようとするのだが、

「No. テルマさん。それはいけません。」

ノクトが余った包帯を投げてテルマの首に巻き付けた。

「ちよ、ノ、ノクトギブギブ！ 僕窒息死しちゃうよ！」

「ならば、誓って下さい。逃げないと。」

「分かった、分かったから！ もう逃げません！ 誓います！」

ようやく包帯から解放されたテルマはゼイゼイと息を吐きながらベッドに横たわろうとしたのだが、

「あ、ごめんノクト、一つがだけいいかな？」

十

「兄さん……………」

アイリは医務室でルクスの様子を見ていた。

ルクスはベルベット達を倒したあとそのまま気絶し、この医務室に運ばれた。外傷はないが《バハムート》の神装を使い過ぎたせいでかなりの負担がかかっていた。そして、

まだ目覚めていない。以前クーデターの時は一週間も目を覚まさなかった。

(このまま目を覚まさないなんてこと無いですよね。)

コンコンと、ドアがノックされて

「アイリ、入っても良いですか?」

クラスメイトでもありルームメイトでもあるノクトの声が聞こえた。

「ええ、大丈夫です」

ルクスから離れてノクトを出迎えると、テルマも一緒にいた。

「何のようでしょうか?」

ノクトだけだと思っていたのだがテルマまで来たのは予想外だった。アイリの声に若干の警戒が含まれる。しかしそんな警戒をしていたアイリもテルマの行動に面食らってしまった。

テルマが深々と頭を下げたのだ。

「……………え?」

「今回の件は誠に申し訳ない。」

アイリは戸惑ってしまった。てつきりルクスが「黒き英雄」と言うことがばれてしまったのでその事言及かと思っていたのだが。

テルマはさらに続けて、

「軍人である僕がいながら、ルクスさんの力をかりてあげくの果てにルクスさんはぶつ倒れてしまった。本当に申し訳ない。」

「ちよ、ちよつと待つてください」

アイリにしては珍しく狼狽えてしまったのかいつもの毅然とした態度がとれない。

「アイリ、落ち着いて下さい。」

横からノクトがアイリを落ち着かせてくれた。

「すみません。取り乱してしまって。それでは、あなたは兄さんが「黒き英雄」と言うこととは知っていたということですね」

「はい、女王陛下から聞いております」

「私聞いてないんですけど？」

確かにルクスの監視とはルクスには伝えたがアイリには伝えていなかった。けれどルクスから聞いていると思っただが、

「これは、兄さんが起きたらお説教が必要ですね。」

すこし怒ったような声でアイリは呟いた。

「そういう訳で今回の件は……」

「大丈夫です。兄さんはやると決めたらやる人ですから、止められなかった私にも責任があります。だから今回の件で謝ってもらっても構いません。」

キツパリとアイリはそういった。

「ありがとうございます。」

再び頭を下げるテルマ。

「じゃあ、僕はこれで」

とノクトと共に出ていこうとしたが、

「テルマさん」

ふとアイリに呼び止められ、

「私をどこかで見かけたことはありませんか？」

と唐突にそんなことを聞いてきた。

「……………？無いと思いますけど。」

「そうですか。すいません呼び止めてしまつて。」

不思議な質問に首をかしげるテルマであつたが、それ以上は聞いてこなかつたのでそのまま部屋をでた。

十



アイリとしやつべつたのちノクトと別れて、テルマは機竜格納庫に向かった。理由はリーシヤの様子を確認することと、もうひとつは、

(未だに挨拶してないんだよな)

テルマは学園に来てからリーシヤにちゃんと挨拶してなかった。挨拶に行こうという気はあったのだが、ここ数日はいろいろあったので結局行けてない。

(怒られるかな……………)

ビビりながらテルマは機竜格納庫の扉を開け中に入る。

中にはガウンを制服の上から羽織ったリーシヤが作業をしていた。

「姫様、怪我は大丈夫ですか？」

「おお、テルマか。大丈夫だ私は強いからな。」

と自慢げに胸を張る。

「というか、私よりお前の方が大怪我だろ。頭に包帯なんか巻いて。」

リーシヤはテルマの頭を指す。

「僕は兵士ですから、これくらいは怪我ぐらいは慣れっこですよ。」

実際このくらいの怪我なら数え切れないし、もつと大きな怪我の経験もある。何故か自慢げにテルマは答えた。

「そ、そうか。あまり無茶はするなよ。」

若干顔をひきつらせリーシャは答えた。がひきつった顔が突然驚きに変わった。

「ど、どうしたテルマ?」

テルマが急にリーシャの前で膝まづいたからだ。がリーシャの驚きの声にもテルマは無視し

「リーズシャルテ王女殿下、挨拶が遅れて申し訳ありません。私はアテイスマータ軍所属テルマ・バルトシフト。此度は任務のためこの学園に赴きました。未熟者ではございますがよろしくお願いします。」

形式通りの挨拶をするがリーシャは戸惑っているのか反応が無い。が

「頭をあげろ」

と言われたので頭を上げる。

「そう、かしこまらなくていい。私はそういうのめんどくさいと思っっている。だから普通にしていいぞ。」

とにこやかに笑うリーシャの顔がそこにはあった。

「これからもよろしく頼むぞ。テルマ」

そう言つてリーシャは手を差し出す。テルマもそれを握つて  
「仰せのままに我が姫君よ。」

しっかりと握手を交わした。

とたんにテルマはへなへなと尻餅をついた。

「どうした？大丈夫か？」

リーシャが慌てるが当のテルマは

「いやー、挨拶が遅れに遅れたんで姫様に怒られたらどうしようかなーつてめっちゃビクビクしてたんです。怒られなくてよかったですー。」

と気の抜けた返事が返つてきたのでリーシャも困惑したような顔になった。

「全くお前は真面目なのか不真面目なのかわからんやつだな」

そんなテルマを見てリーシャも呆れ顔をする。

「まあ、何はともあれこれからよろしくお願いいたします姫様」

「リーシャでいい。皆そう呼んでいるからな」

「いや、さすがにそれは……」

「なんだ？王女の命令が聞けないのか？」

してやったりといった顔でリーシャは得意げに笑つた。

「……………分かりました。これからよろしくお願いします。リーシャ様」  
 「ああ、よろしくな」

十

ルクスが目を覚ましてからいろんな人達が医務室を訪れた。妹のアイリは起きた時からいたが、他にも三和音<sup>トライアド</sup>の3人に、幼馴染みのフィルフィ、

留学生のクルルシファー、騎士団<sup>シヴァレス</sup>の団員達、クラスメイトなどたくさん来てくれた。さらに

「姫様を助けて下さってありがとうございます。ルクスさん」

「いいよ、僕の意志でやったことだし。それにしても怪我は大丈夫?」

「ルクスさんに言われたく無いですね。」

談笑を交えながら話している二人だが不意にテルマが

「今回の件はすいません。ルクスさんが「黒き英雄」ということがばれてしまつて。」

今回ルクスがバハムートを使ったことで騎士団<sup>シヴァレス</sup>の団員達にはルクスが「黒き英雄」であることがばれてしまった。幸いにも知られたのは騎士団<sup>シヴァレス</sup>の団員達だけで他の生徒に

はばれて無いのだが、少なくともルクスはこの学園にはいられないだろう。

「本当にすいません」

「しようがないよ。あの状況では出し惜しみなんて出来ないしね。」

それにとルクスは続け

「守りたいものが守れて良かったよ。」

その顔は微塵の後悔もなく清々しい表情だった。

「そうですか。」

そう言われるとテルマ自身も救われた気がした。都合のいい解釈かも知れないが、けれどひとつだけテルマの心にルクスの言葉が刺さる出し惜しみという言葉が。

十

「どういうことですかレリイさん!？」

ルクスが勢いよく扉を開けると

「正式入学おめでとう！ルクス君！」

小さな歓声とともにパチパチと拍手が巻き起こる。学園長室にはアイリ、クルルシフアー、フィルフィ、シヤリス、ティルフアー、ノクト、さらにはクラスメイト達も集まっていた。よく見ればテルマもいる。

「え……………」

てつきりレリイだけだと思っていたのだが他にも生徒がいて思わず固まってしまった。

そして最後に一人制服の少女が入ってきた。

「リーズシャルテ、様？」

「こほん。では、学園長の代わりに、私が挨拶させてもらおう。雑用子ルクス・アーカディアよ。新王国の王女たる私から、咎人の貴公に君命を授けよう。」

リーシャはルクスの前に歩いてくる。

「貴公の協力でー私は命を救われた。この城塞都市と、ひいては我が国を守ることが出来た。貴公の身に確かな正義があることを、この私が認め、称えよう。」

そう告げてリーシャは微笑みかける。

「だから、私からの命令だ。お前はここに残ってくれ。わたしたちの雑用王子として、初めての男の生徒として、わたしたちの力になってくれ。本来ここにいることは許されな  
いお前の存在を、わたしたちが認めよう。異論はないな、英雄。」

「え、つと……………」

時が止まったような静寂。

ルクスが困ったように顔を上げるとテルマも困ったような顔をして

「本当はルクスさんをこの学園に残すか、上の方もかなり迷っていたんですけど、リーシャ様がどうしても言うんで。」

「ち、違うぞ！私はルクスの働きぶりを見てだな……」

それまで堂々としていたリーシャの顔が真っ赤になり早口にまくし立てられる。

（そっか、そういうことか。）

また助けられたんだなとルクスは思った。

「というわけで、なんてゆうかな。まだへワイバーンへの剣も修理中だったんだが、受け取ってくれるか？私の剣を」

リーシャは赤い顔のまま、目をすこしだけそらしながら剣を差し出す。

それを見た瞬間、ルクスはふっと息を漏らして膝まづいた。

「仰せのままに我が姫君よ」

ここにルクス・アーカディアの入学が正式に決まりルクスは新王国で初めての居場所を手にいれた。

「あ、ルクスさん僕もですからね」  
……もう一人の男と一緒に。



## 第10話・争奪戦

五月になったある日の放課後、テルマは外のベンチで休憩していた。ルクスの監視目的でこの学園に入学したテルマだが、何故かルクスと同様に他の生徒から雑用を受け持つことになってしまった。だがベルベットの事件から2週間がたちルクスはもちろんテルマもすでに復帰して学園での生活を送っている。

「平和だなー」

と水筒の水を飲みながら呑気なことを言っていると、

「全然平和じゃ無いんですけどー!」

ダダダダーと向こうから走ってくるルクスが見えた。その後ろにはたくさんスタツの女子生徒がルクスを追いかけている。その手には護身用の棍棒、捕縛用のロープ。更には、

巨大な投網、手枷に首輪、etc

………ここお嬢様の学園だよねと、そんなツツコミを飛ばしたくなる。がそんなことはお構いなしに女子生徒達はルクスを追いかける。

「まちなさーい!」

「向こうから廻って!挟み撃ちにするわよ!」

「了解！ 追い込み頼んだわよ！」

と次々に指示が飛びルクスを捕まえようとする。ルクスが女子生徒に追われている理由は数十分前に遡る。

ルクスは普段からたくさんの依頼を受けているのだが、あまりにも数が多すぎるのでたまっているのだ。それで生徒達の不満が溜まってきたので学園長のレリイが不満解消のために「ルクス君争奪戦」なるイベントを開催したのだ。ルールはルクスが持っている特別依頼書を制限時間内に奪った子がルクスを一週間独占できる、というものだ。それを聞いた生徒達は血眼、と言ったら言い過ぎかも知れないがそんな勢いでルクスを探す。捕まったら何をされるか分からないそんな危険を孕んでいた。

(ルクスさん頑張ってください。)

心の中でルクスに合掌したテルマであった。

十

「大変でしたねルクスさん。」

「そう思うなら昨日助けて欲しかったよ。」

あははとルクスの視線を剃らしながら紅茶を飲む。結局ルクス争奪戦はクルルシファーが勝利し、一週間ルクスを独占することになったのだが、

「恋人ですか……………」

クルルシファーからの依頼は「一週間恋人になってほしい。」との事だ。クルルシファーの性格でルクスにそんなことを頼むのは意外だった。多分何か裏があるのだろう。

(恐らく政略結婚の類いだろうな。)

テルマは何となく目星はつけていた。クルルシファーは異国からの留学生。エインフォルク家は新王国との繋がりがほしいのだろう。そのためにクルルシファーを新王国の強い立場を持つ権力者と婚約を結ばせようとして新王国に行かせたのだろう。

「貴族っていうのも大変ですね」

「君も一応貴族だよね。」

「養子なのでそこまでは……………」

と紅茶を飲み干して答える。

「まあ、頑張ってください恋人役」

「僕、まだ役なんて言っていないのになんで分かるんだよ」

「軍人ですから」

それ、理由になってないよと言ってやりたくなかったルクスだが、その言葉を飲み込んだ。  
だ。

とテルマが立ち上がろうとするとレリイが歩いてきた。

「こんにちは、テルマ君。学園での生活はどうかしら?」

「今のところ問題は無いですね」

あの事件以来テルマもすっかりこの生徒たちに認められ、王都から帰ってきた三年生も今は様子見といったところだ。なので今のところ目に見える問題は無い。

「そう。それはよかったわ。でもねテルマ君。今貴方に対する不満がたくさん集まって来ているのは知っているかしら?」

「はい?」

いったいなんのことか一瞬分からなかったが、パツとルクスの顔がニヤニヤしているのを見てテルマは思った。

(え……!?うそだろ、)

「はい、特別依頼書。今から一時間よ、がんばってね」

つまりルクスがここで昨日争奪戦の話をしたのもルクスとレリイの策の内。シナリオ

「がんばってね、テルマ君」

「テルマ！君ならできる！」

レリイは微笑み、ルクスは笑いを堪えるように口を押さえている。

「いや、まだやるとは……………」

「始まったわ！捕まえるのよ！」

とテルマが反論の途中で食堂の入り口からたくさんの女子生徒が雪崩れ込んできた。

「まじかよ」

テルマは眩きながらダツシユで窓から外にでた。

十

「まちなさーい！」

「向こうに行ったわまわりこんで！」

「了解！」

(なんなんだ、この連携のよさは)

テルマは走りながらそんなことを思っていた。昨日のルクスの時もそうだったのが生徒達は百人以上いるのにその統率が全く乱れない。先読み待ち伏せは当たり前。こちらでも一瞬も気を抜けない状況が続いていた。

「いたわ！こっちよー！」

「ツ……………くそー！」

前から生徒の大軍が迫ってきたので方向転換して右に流れる。どの程度の距離が空いているのか後ろを見ると、

生徒達から投げ縄が飛んできた。

「ええー！昨日そんなことしてなかったじゃん！」

が、嘆いていても投げ縄は飛んでくるので、なんとか避ける。が明らかにスピードダウンしてしまい生徒達との距離がどんどん詰まっていく。

そして

「とうとう追い詰めたわ。」

テルマの後ろは壁。そしてテルマを中心に半円の形で囲まれていた。生徒達は勝利を確信した笑みを浮かべていた。後はもう特別依頼書を誰が得るかその戦いだ。その戦局の変化を好機と捉えたテルマは腰のポーチからあるものを取り出した。

「ちよつ、なにそれ!？」

一人の生徒がテルマの取り出したものに気がつき思わず後退る。テルマの手に握られていたのは手榴弾だった。

それに気がついた他の生徒も思わず後退る。

「大丈夫ですよ。危険はありませんから。本当は使いたく無かったですけど。」

テルマはその手榴弾をおもいつきり地面に叩きつけた。

ボン!と音とともに大量の煙がもくもく立ち込めた。あつという間にテルマ達を飲み込んでゆく。

「ちよつ、ちよつとなにもみえないんだけど!」

「あ、暴れないでよ! 押さないで!」

「キヤツ!、誰よおしりさわったの!？」

パニックになる生徒たち。テルマが使ったのは煙幕手榴弾<sup>スモークボム</sup>。装甲機竜が発見される前から使用されていた兵器。幻神獣<sup>アビス</sup>にダメージを与えることが出来ず、只の兵器は無用の長物とされてきたが、幻神獣<sup>アビス</sup>にも視覚はあるのでテルマは目眩まじや、逃走用に時々使用している。

徐々に煙が晴れて生徒たちの視界が回復したころ、既にテルマの姿はそこには無かった。

「うそ！テルマ君いなくなってる！」

「そんな！皆で囲んだのに……………」

「……………ツ、とにかく探すわよ」

テルマがいなくなったことで生徒たちは、何グループかに分かれてテルマを探しにいった。

「ふう、何とかなったな。」

生徒たちがいなくなったころ、テルマは大きく息をついた。テルマがいるのは木の上。煙幕で全員の視界が利かなくなったときに、跳躍し、壁を蹴り更に跳躍。生徒たちを飛び越し木の上に隠れたのである。案の定生徒たちはテルマがこの場を去ったと思っただけで誰一人周囲を探さずまた学園を探しにいったのだ。

「あと少しだし、もう大丈夫だろ。」

と下を確認して木から降りるテルマ。

しかし

「抜かったなテルマ」



「えっ?」

地面に足を着けた瞬間、何故かももう一度足が宙に浮き逆さまになって吊るされた。

「は?.....はああ!」

何が起きたか分からない、いや単にトラップにかかっただけなのだが、全く予想しなかった状況にパニックになってしまった。バタバタと暴れるがロープは足にがっちり巻かれているので全く外れない。

「ふっ、計算通りだよ」

と草影から、シャリスが出てきた。しかも他の草影からティルフアー、ノクトも出てきた。

「なんで、三人がここに?」

いや、自分を捕まえるため、と言うのは百も承知だが少なくともシャリスは自分の姉なのでこの争奪戦に参加しないと思っていた。いや

(逆だ。シャリス姉は真面目だけど、こういう催しにはバンバン参加するお祭り気質だった。むしろ一番警戒しなくちゃいけなかったのに。)

自分の姉であるシャリスは、やはり他の生徒よりテルマのことを知っている。そしてテルマの行動を予測して、こうして捕まえにきたのだろう。

「さて、特別依頼書はどこかな?」

とシヤリスはテルマに近づくが

「ちよつと待つてシヤリス。そのまま依頼書貰おうとしてるでしょ？」

とティルファーが間に入ってきた。

「何をいつてるんだティルファー。私は依頼書を取りだそうとしてるだけだぞ」

「嘘だね。だったらなんでそんなに時計を気にしてるの？ 大方「取り出したらちようど時間でしたー」とか言うつもりなんでしょ。」

凶星を突かれたのかシヤリスがうつ、と口ごもる。確かにもう時間が無いので取り出した時、時間になればそのまま依頼書が自分のものになると考えた。

「さあ、もう時間も無いしさっさと依頼書を取り出して……」

「させないよ！シヤリス！」

とシヤリスとティルファーが取つ組み合いを始めてしまった。姉の醜態を見せられあきれるテルマだが、ここを好機と見て脱出を図る。

が、

「させません」

淡々とした声とともにテルマの手は取られた。

「ノ、ノクト」

完全に不意を突かれた。思えば三和音<sup>トリアド</sup>は三人いるのだ。なのにノクトことを忘れる

とは、不覚を取ってしまった。

(完全にパニツクになつて周りが見えなくなるなんて)

まだまだだな、と思うテルマだったが、ふと背中に柔らかな感触があつた。

(こゝ、これつて、ノクトの)

今ノクトは羽交い締めのような形でテルマの制服の中を探っている。ノクトのすべすべした手の感触が自分の体をまさぐつている。更に奥の方まで手を入れようと更に密着してくる。当てられる柔らかい感触が更に強くなつた。

(ヤバイヤバイヤバイヤバイ!!)

今すぐにノクトに離れてもらうべきだと理性は言う。しかし悲しきかな、テルマも男の子もつと触れていたいという本能が勝つてしまう。

「ありました」

が夢の時間もあつという間に終わり、ノクトの手には依頼書が握られていた。

そして、

「終了時刻です！今赤い依頼書を手にしている女子生徒が、テルマ君を一週間、自由にする権利が手に入ります！」

係員らしい女子生徒の声が、甲高い声とともに、遠くから聞こえてくる。

「ああ！ノクトいつのまに！」

「しまった！なんたることだ！」

やっと現状に気がついたのかティルファーとシャリスは取っ組み合いを止めて我に返った。

が、ノクトはそんな二人に気を止めもせず

「では、これからよろしくお願ひしますね。テルマさん」

とテルマに声を掛ける。そしてそのまま学園の方に戻っていった。それをなんやかんやと文句を言いながらシャリスとティルファーが後を追った。

「ちよつとーこの縄ほどいてよー」

結局テルマは数分後、通りかかったルクスに助けられた。